

## 北東戦線

フェリペ・アンヘレスは細心の注意を払って、自分が指揮する最初の戦いの作戦を練った。兵力、装備においては互角であった。アンヘレスは北東地域の指揮官エミリオ・マデロの部隊とメキシコ市から回した、合わせて一万一千を従えていた。憲政軍はカランサ派アントニオ・ピヤリアルとピヤの元の同僚で、今は強力な敵となったマクロビオ・エレラが同じような数の兵を指揮していた。アンヘレスは牽制作戦を行った。彼はエミリオ・マデロをカランサの出身地コアウイラ州都サルティヨへ向けて発進させる一方、主力部隊を十九両の列車に乗せサルティヨから九十キロも西に離れたエスタシオン・マルテに送り込んだ。カランサ軍はアンヘレスの主力部隊を迎え撃つためエスタシオン・マルテに向かった。しかしアンヘレスは敵を待たず、八百を後衛部隊として置き、残り全部を下車させてマデロの部隊増援のためにサルティヨへ進めた。彼らは共に州都防衛の前衛基地のあるヘネラル・セペダの町を襲った。戦わずしてサルティヨへ逃げる守備兵六百を追ってアンヘレスは州都に向かった。非力なカランサ軍はモンテレーへ撤退し、アンヘレスは一発も弾を撃たず州都を手に入れた。<sup>45</sup>

サルティヨを握ったアンヘレスは、メキシコ最大の工業都市モンテレーを支配しているカランサ軍にとって直ちに脅威となった。アンヘレスの進軍を阻むためカランサ軍は全勢力をサルティヨ郊外僅か十数キロ北東の町ラモス・アリスぺに結集した。1915年1月8日、奇妙な戦闘が始まった。当日は濃い霧が町全体をすっぽりと覆い、敵も見方も見分けられない中で戦闘が始められ、同じような制服であったため、しばしば敵か味方か見分けが付かなかった。ラウル・マデロは二度も捕らえられたのに、敵の指揮官とは気付かれず二度とも放免された。カランサ軍は味方に向け発砲し、ピヤ軍も同じような間違いを犯した。マクロビオ・エレラは戦意を失ったカランサ兵を止める事が出来ず、大量の弾薬や装備をアンヘレスの手に渡して逃亡した。ピヤ軍の戦利品はカートリッジ二十万個、機関車十四とワゴン十九台、一万一千発の砲弾、そして捕虜は四分の一に相当する三千人であった。<sup>46</sup>

敗れたカランサ軍が放棄したモンテレーをアンヘレスは手に入れた。彼は自ら軍事作戦を迫行したのみならず、政治的イデオロギーにそって行動した。戦闘終結後多数のカランサ軍捕虜を整列させ、君たちは感わされた兄弟であるとして、条件付で全員の釈放を命じた。条件とは、大声でもう二度と憲政軍のために戦わない、と言うことであった。この宣誓をしたカランサ軍のジェネラル・イグナチオ・ラモスは二日後にパブロ・ゴンザレス軍に再び加わり、会議派軍と戦った。カランサ軍が鉄道の駅を焼き払って逃げた事に怒ったモンテレーの市民はアンヘレスを歓喜して迎えた。市の上流と中流階級は宗教の自由、個人の政治的信条と財産所有権の保証を唱えたアンヘレスに満足した。このアンヘレスの穏和な態度に違和感をもったピヤ派のジェネラルたちは、知事を選ぶ選挙で皆ラウル・マデ

ロに投票した。その数週間後にやって来たビヤは自分のスタイルで政治を迫行した。ビヤは裕福な商人や事業家を集め、物価を吊り上げて貧困層を苦しめたとして彼らを責め、彼らをチワワへ流刑にすると脅した。彼らは懇願し、話し合った結果、ビヤに百万ペソを出す事で決着した。この金は軍事目的ではなく、貧しいものへの食糧の購入にあてた。それでも食糧は逼迫し、十分な成果を挙げる事はできなかった。周辺はカランサ軍に押さえられていて、モンテレーは孤立したままであった。<sup>47</sup>

カランサ軍がモンテレーから大急ぎで撤退したため、オブレゴンとグティエレスが交わした文書を置き去りにした。グティエレスに裏が有る事を知ったビヤはグティエレスの処刑を命じた。難問を抱えていたグティエレス大統領は、メキシコ市からうまく逃れた。グティエレスとルシオ・ブランコの軍を討討するため、ビヤはメキシコ市から一万の兵を動員した。その間オブレゴンはプエブラからサパタ軍を追い出し、次いで簡単にメキシコ市を占領した。オブレゴンのメキシコ市奪還はカランサ派の意気を高揚し、会議派の意気は消沈した。ビヤがカリスト・コントゥレラスとロドルフォ・フィエロに託したグアダラハラは再びカランサ派のディエグスの手に落ちた。不敗の北部師団の神話が崩れた。汚名返上のためにビヤは部隊をかき集め、グアダラハラ奪回に向かい、得意の騎兵部隊による攻撃で市は再び北部師団のものになった。ディエグスは殆どの部隊を連れて海岸線へ逃れた。

48

45. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P483

46. Ibid. P483

47. Ibid. P484

48. Ibid. P485